

# 京都・平等寺1000年記念行事をめぐる伝統の創生

——「癒し」の伝統と近代——

小 野 尚 香

(パーソナル・コミュニケーション：平等寺住職 大釜諦順僧)

(平等寺住職 大釜諦順僧による)

## 因幡薬師開山1000年記念法要

平成15年の旧暦4月8日に開山1千年を迎え、これを記念して有縁の方々と共に記念法要を平成15年5月4日5日の両日に執行しました。

両日共に寺の外周道路の車両の通行を規制、「てづくり市」各店の有志による出店が並びました。混雑を避けるため境内を閉鎖し、法要、記念行事参加者以外の入場を規制し、行事参加者は有料としました。本堂正面には舞台が設えられ記念行事の会場がつけられました。また、本堂とは別に因幡薬師客殿にて寺宝公開が行われ、普段は非公開の仏画などが展示されました。うどんコーナーやお茶席も設けられ参拝の方々に振舞われました。

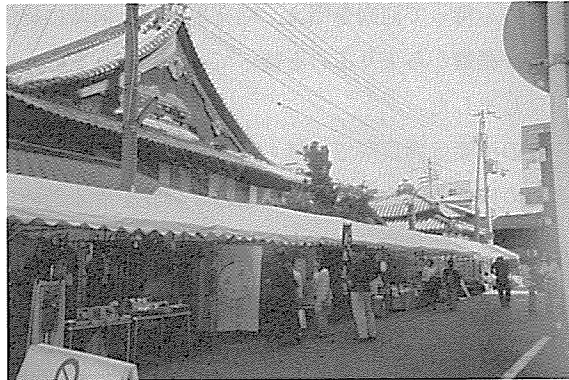


写真1 てづくり市 平等寺西側外壁沿い

## 5月4日 晴れ

この日は真言宗智山派関係寺院10カ寺出仕による「表白付き理趣三昧」を厳修いたしました。

午前9時半 集会、午前10時 習礼、住職は堂内別席に黒衣如法衣で着座して職衆の入堂を迎えました。衣帯は導師が色衣七条袈裟、職衆は色衣如法衣で、10時30分上

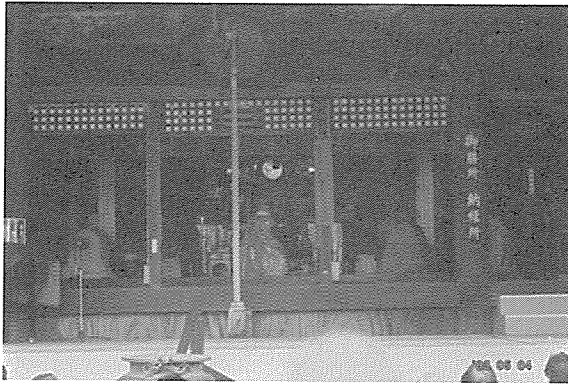


写真2 理趣三昧法要 真言宗智山派寺院出仕

堂の鐘を合図に導師・職衆が上臈順に客殿衆会所を出て本堂回廊を通り、裏戸より入堂しました。本尊須弥壇の後ろで一臈側、二臈側とに別れ入堂しました。導師は別座には着かずに大壇の前へ行き蹲踞して柄香呂をとり、それを合図に一斉に三礼して着座。各自護身法を結呪して導師の所作を待ちました。

導師が散杖で舎水器の縁を叩く音を聞いて四智梵語発音、頭が終わって助衆が続き最後に鉢を突いて四智梵語が終わりました。鉢の音が鳴り止むと導師表白が有り、開山橘行平卿、歴代住職、先師尊霊への報恩感謝を述べ、理趣経読誦。理趣経が終わり、導師の後鈴が終わりますと不動讃を発音。不動讃が終わると鉢が突かれ、鉢の音が消えるのを待って回向を唱え、唱え終わると同時に終鐘が鳴り法要が終了いたしました。導師が禮盤から下りるのを待って一斉に三礼をし、浅臈順に入ってきた時と逆向けに出堂しました。

この法要は真言宗では最も多く行われ、且つ重要な法要で、妄念を離れた境地に入るために行われる法要で、先祖のご供養をするためによく行われる法要です。

法要後因幡薬師（平等寺）住職より挨拶が有り法要を終了いたしました。

この間、午前10時の開門より本尊薬師如来が開扉され、多くの方が参拝されました。

12時で拝観を終了し会場を閉め、午後の会場設営を行い12時40分に改めて開場、午後1時より記念コンサートを開催いたしました。コンサートは2部構成で、それぞれ、本尊薬師如来に奉納する意味を込め演奏されました。

午後1時にコンサート参加者に対しての住職の挨拶がありその後、

第1部は地元出身の若手音楽家の平井真美子さんのピアノと大槻圭さんのフルートの合奏で、クラシック音楽や誰でも知っている「椰子の実」、「浜辺の歌」など11曲を演奏。

約50分の演奏でした。

15分間の休憩をはさみ、

第2部はアメリカ出身の歌手イボンヌ・ギルバートさんによるソプラノ、ピアノ伴



写真3 記念コンサート 1部

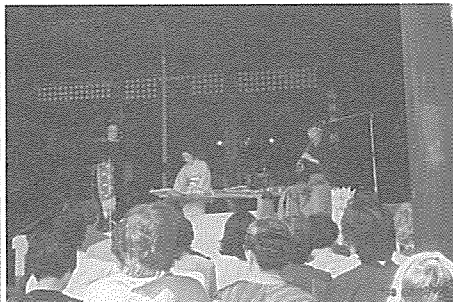


写真4 記念コンサート 2部

奏は平井真美子さん。伴奏が川村雅葵さんの琴，川村泰山氏の尺八に代わり，日本の曲を。

伴奏がまたピアノに代わり，「からたちの花」，「川の流れるように」。

この日の法要出仕寺院は 真言宗智山派の愛染院，青蓮寺，宝積寺，上品蓮台寺，清和院，玉洗院，海住山寺，安楽寿院，大報恩寺，亀龍院の10カ寺で，同じ宗派で，親交の深い近隣寺院の協力をいただきました。

この日の参拝来場者数は200名，本尊薬師如来に参拝した後コンサートを楽しまれておられました。

### 5月5日 晴れ

午前10時開門，法要出仕者集会 10時30分「大般若転読会」(※3)を執行しました。この法要は除災招福を祈念する法要で真言宗では派が異なってもほぼ同じ作法で行うため一緒に法要を行うことができます。この日の法要出仕寺院は真言宗智山派以外の寺院も多くこの法要を執り行いました。導師は因幡薬師(平等寺)住職が勤め，会奉行は昨日に続き亀龍院住職 田村祐一師が勤めました。法要出仕者は因幡薬師住職を含め9名でした。衣帯は，導師は色衣七条袈裟，職衆は色衣紋白五条袈裟。

10時30分に前日と同じように上堂の鐘を合



写真5 大般若転読法要 近隣関係寺院出仕

図に入堂，導師が登礼盤し舎水器の合図で前讃を発音，職衆が続きました。続いて導師の表白が有り，導師の転読発音で，助衆が一斉に転読を開始しました。これは経本を一気にパラパラと見ることで一卷を読んだことになるものとされるもので，全員で六百巻の経本を読みます。六百巻の転読を終え導師の説草が続きました。最後に心経法楽，諸真言を唱え法要を終了いたしました。法要時間は約40分間，当山のさらなる1千年に向けての除災招福を祈念すると共に参列各位の招福を祈り法要を終えました。

#### 法要終了後住職挨拶

この日も午前10時より法要終了まで本尊薬師如来の特別開扉が行われ多くの参拝者がこられました。

12時に一旦会場閉鎖し記念行事，大蔵流狂言の準備をし，12時40分狂言開場，

午後1時より大蔵流狂言，「鬼瓦」「因幡堂」「口真似」の3番を上演いたしました。

出演は茂山千作，茂山千五郎，茂山七五三，他

鬼瓦，因幡堂は当山を舞台とした狂言であるため かえって若干のアレンジを加えての上演となりました。

狂言終了後拝観を再開し午後4時に終了しました。

この日の法要出仕寺院は 法泉寺（真言宗智山派），大黒寺（真言宗単立），遍照寺（真言宗御室派），大徳寺（真言宗御室派），正法寺（真言宗東寺派），高野山堀川別院（高野山真言宗），亀龍院（真言宗智山派） 青木明海師（真言宗御室派），

この日の参加者は250名でした。

#### 表白文（全文）

慎み敬って真言教主大日如来両部界会諸尊聖衆，殊には本尊聖者医王善逝日光月光十二神将諸大眷属総じては尽空法界一切三宝の境界に白して言さく 夫れ以れば当山本尊因幡薬師は今を距る一千余年前，中納言橘行平卿，夢告により海中より見いだし

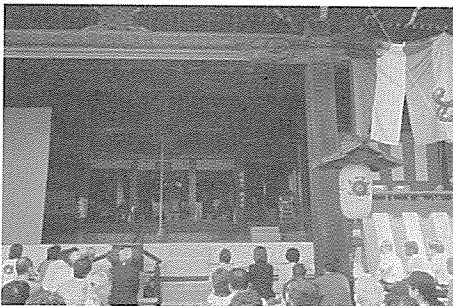


写真6 法要風景

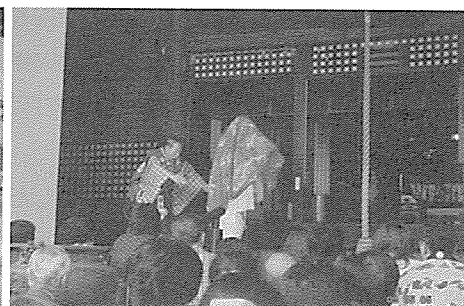


写真7 狂言「因幡堂」大蔵流茂山狂言会

賜いし尊像にして、その源は祇園精舎に奉られし靈尊なり。初め因幡の国に仮安されしが、行平卿を追いこの地に飛来され、爾來尊像この地に留まり、仏徳普く遐爾におよぶ。今歳恰も開基一千年の佳辰を迎え、茲に記念法要を修し奉り、奉納行事を執り行う。以て開山橋行平卿、初代本願光朝禪師、並びに歴代先代先師の遺徳に報答す。仰ぎ願わくは、本尊聖者、大悲摂受の眼差しを回らし、施主が願念各々照覽せられ、法縁倍々滋潤し寺門いよいよ隆昌せんことを。乃至法界、平等利益

.....

## はじめに

京都七条近くの塩小路から不明門通（あけずどおり）を上がり、松原通を過ぎると、赤い奉納幡が塀を囲む真言宗智山派福聚山平等寺がある。真言宗の寺であるが、京都の人は「お薬師さん」あるいは「因幡薬師」とよぶ。京都の人びとには、老若男女問わず、節分の「星祭り」で馴染み深い。

2007年長月<sup>ながつき</sup>の今、平等寺門前に立っていると、早朝から手を合わせて通り過ぎていく人が見られる。祈願に訪れる人、法事の相談に来る人、ちょっと話しにと腰掛けていく人、近くに来たからと立ち寄る人、文化財の勉強に立ち寄る人、そして毎月8日の「市」など、人が行き交い、集う寺である。かつて、眼病（ガンビョウ）に良いといわれた、その文字から派生して、昨今は、「ガン」封じの寺として祈祷にすがる人もいる。

京都平等寺因幡堂に安置されている薬師如来立像は、因幡の国より飛来して1000余年になると伝えられる。その姿は、栄枯盛衰の時空を超えて、今を生きる人びとの祈念の前に在る。しかし、その時々々の寺の現実、その時代その時代を生きた寺にまつわる人びとの思いや語りによって構成されてきた。

平等寺の「今」には、2003年に迎えた開山1000年記念行事前後に、この祭りを支え、また、集って薬師如来像に縁を結んだ一人ひとりの思いが織りなされた力学構造をもつ。集った人は何を求め、何を語り、何に癒され、何を思いに認めたのであろうか。平等寺開山1000年法要ならびに奉納行事をめぐる諸相と歴史的資料から、広義の意味での人を「癒す」近代と前近代を垣間みたい。

## 1. 開山1000年に近づくにつれて

### (1) 「往にし方<sup>い</sup>」が語られ始める

1003（長保<sup>ちやうわ</sup>5）年、薬師如来立像は京都に來られたと伝えられている。現住職は、跡取りとして平等寺に戻ったときから、自分の時代にその千年目がくることを周知していたと語る。けれども、僧となったおよそ30年前、寺の本堂は閉められ、仏事もほとんど途絶えていた。住職となった10年余前ですら、寺の境内にはほとんど人の気配もなく、檀家もなかったという。「昔は夜店でにぎおうて…」という近隣に住む高齢者が思い出す縁日は、遠い過去の様相であった。

開山千年を迎える4年半前の1998年11月23日、その記念として、平等寺では客殿を建て直して落慶法要を行なった。法事などが縁で、寺に少しずつ檀家が増えはじめていた。法要の挨拶の言葉として、「きたる西暦2002年（数え年のため、2002年と記載されている、筆者注）の当山開山をむかえるにあたり当山客殿を新しく立て直し…」と記した。

落慶法要では、御本尊である薬師如来立像、高倉天皇の寵愛を受けたという小督局の品と伝えられる寺の宝物が公開された。千年あるいは数百年の時を超えて、客殿に一つ一つ品々が陳列された。その前年1997年に「狂言における因幡堂の位相」を研究発表した名古屋女子大学の林和利氏が、過ぎし日の因幡堂と狂言について歴史的資料を用いながら語った。それぞれの時代に記された古文書や古記録には、因幡堂の薬師如来が高貴な人にも町衆からも信仰を集め親しまれ、その薬師信仰とともに、境内では人びとが関わり合い、楽しみを共有し、多くの芸能が生まれ催されてきた足跡がありありと記されていた。

午後から、因幡堂とゆかりのある大蔵流狂言・茂山一門によって「鬼瓦」「因幡堂」が演じられた。訴訟のお礼参りにやってきた大名が、因幡堂の鬼瓦をみて遠い郷里の妻を思い出すという「鬼瓦」、そして、大酒飲みの妻に嫌気がさし、妻を里帰りさせている間に離縁をした男が因幡堂に参籠して、新しい妻を与えて欲しいと願い、縁のあった女性が元妻であったという「因幡堂」。室町時代に生きる人びとを描きながら、時代を超えて変わりゆく姿とともに、変わらない人の情が演じられた。

檀家をはじめ参拝した人たちは、因幡堂の歴史に触れ、往<sup>い</sup>にし方<sup>ま</sup>からつづく時間を楽しんだ。薬師如来立像、そして、そのお堂の1000年の歳月は、確かに、そこに集った人の心をよぎったという。無料で公開された「狂言」には、境内にあふれるほどの多くの人が集まった。しかし、その賑わいは、その日1日で終わった。因幡堂は、まだ、高齢者の方から聞くような賑わいには遠い状況であった。

## (2) 「市」の復活

それから2年半後、開山1000年にあと2年を数える2001年4月8日、薬師如来がやってきたと伝えられる日に、かつての賑わった夜店の記憶をわずかに彷彿させるような「市」が再開した。

きっかけは、その前年2000年秋に境内のお地藏さんが盗まれ、壊された地藏堂の修理に訪れた左官の計らいであった。修理に通う折に、左官は住職夫妻と語り、かつてこの寺が縁日でにぎわったこと、再び、人が行き交うお寺になってほしいと願っていることを知った。その左官の家族が別のお寺で出店をしていた。フリーマーケットや「市」の知識をもち、出店の仕事を通して関係する人とのつながりももっていた。平等寺住職夫妻の願いを受けて、まもなく、「市」の実現へと動き出したのである。

そして、2001年春4月8日、「因幡薬師てづくり市」と名づけられたフリーマーケットが開かれた。近隣からやってきた人たちによって、手作りのアクセサリーや布で作られた小物やアクセサリーや木工品、また手づくり食品など、さまざまな品が軒先に並べられた。寺に人が集うきっかけが一つ生まれた。まもなく、NHKが取材に訪れ、番組で、「因幡薬師てづくり市」の様子が放映された。

それから、毎月8日、人が賑わう日も、閑散とする日も、「因幡薬師てづくり市」は休むことなく続けられている。店頭立つ人やお客として訪れた人の多くが、本堂を覗き込み、またお参りをし、「お薬師さん」と多様なかたちで縁をつないでいく。「市」の様子は、近くに住む高齢者にとって、にぎやかな縁日の遠い思い出と重なっていた。この「市」は、その後、歳時には、たとえば節分の「星祭り」やお釈迦様誕生を祝う「花祭り」の際にも行事の一環として賑わいを添えるようになっている。

## 2. 開山千年に際し、往にし方の姿に新たな記憶を重ねはじめる

### (1) 開山1000年祭を計画する

2002年の春、開山1000年祭の計画が動きはじめた。5月5日、平等寺住職は、翌年の開山1000年の奉納行事として、狂言興行を依頼するために、京都に居する茂山一門をたずねた。「因幡堂」が演目として登場する狂言、かつて因幡堂境内に集まって町衆が笑いあった狂言である。古くは室町時代に、因幡堂を舞台にした「鬼瓦」「因幡堂」「仏師」「六地藏（金津地藏）」の狂言が生まれたと記録が残されている。

住職は、奉納行事として、最初にその狂言興行を決定した。大蔵流狂言そのものも、時を超えて受け継がれてきた。その狂言を、平等寺が経てきた時間を超えて、この今、時を共有して、寺の境内で演じてもらいたいと願ったのである。

まもなく、開山1000年法要記念行事の実行委員会が発足した。委員会を構成する檀

表1 因幡堂平等寺開山1000年法要・記念行事  
 (両日とも、午前中を法要、午後から奉納行事とする)

第1日 5月4日	
10:00	開門 受付開始 特別拝観(12:00まで) 本尊薬師如来 如意輪観音 釈迦如来 本堂内陣 観音堂 寺宝  てづくり市開始(16:00まで) *写真1 お茶席 (13:00まで)
10:30—11:30	開山1000年法要 *写真2
11:30	うどんコーナー開始
12:40	コンサート開場
13:00	コンサート開演 写真3 1部「ピアノとフルート ディオ」 ピアノ 平井真美子 フルード 大槻 圭
14:00	2部「アリア」 写真4 独唱 イボンヌ・ギルバート 箏・十七弦 川村雅葵 尺八 川村 泰山
15:00	コンサート終了

家たちは、檀家となってまだ数年であり、檀家同士でも初めて顔を合わせる人たちもいた。寺の歴史について、薬師如来立像が安置された謂れについても、そして、時間的空間的に、京都の町衆に受け止められてきた寺の存在そのものの固有性についても、熟知している人は希であった。

実行委員会を発足するにあたり、京都にある近隣の寺の檀家総代を務める住職夫妻の友人が、自らの経験をふまえて助言者として加わった。平等寺にとっては、何もかも、手探りのスタートであった。

檀家の人たちは、開山1000年記念行事の企画にあたり、平等寺について調べ始めた人もいた。寺の往にし方の事跡や様相について、住職から話しを聞く機会も増えてい



第2日 5月5日	
10:00	<p>開門                      受付開始                      特別拝観 (12:00まで)                      本尊薬師如来                      如意輪観音                      釈迦如来                      本堂内陣                      観音堂                      寺宝</p> <p>てづくり市開始 (16:00まで)                      お茶席 (13:00まで)</p>
10:30—11:30	開山1000年法要 写真5, 6
11:30	うどんコーナー開始
12:40	狂言開場
13:00	<p>狂言開演 *写真7</p> <p>「鬼瓦」                      大名 茂山千作                      太郎冠者 茂山千三郎                      後見 茂山宗彦</p> <p>「因幡堂」                      男 茂山千五郎                      夢想の妻 茂山正邦                      後見 茂山千三郎</p> <p>「口真似」                      太郎冠者 茂山七五三                      主人 茂山逸平                      客人 茂山宗彦                      後見 茂山千三郎</p>
	住職の挨拶

\* 当日配布された案内書より筆者作成  
 写真は平等寺提供

った。その過程で、人びとから「お薬師さん」とよばれ親しまれている寺の長い歴史に触れるようになったという。委員となった檀家のひとりには、目の前にある寺に、「威風さえ感じた」と語った。

因幡堂は、薬師信仰とともに、時の権力者であった天皇家とも、将軍家とも、また町衆とも関わりをもったお堂であった。寺の住職や檀家やゆかりある人たちにとって、開山千年にむけた法要行事を企画し具体化していくプロセスは、寺の往にし方の姿に思いを馳せ、寺の栄華や賑わいを共に語り合う機会となっていった。

## (2) 平等寺をめぐる謂れ

多くの書物に、平等寺に関わる逸話が残されている（註①～③）。その多くの中から、「薬師如来縁起」と町衆の寺である平等寺の様相の一側面を概観しておきたい。

### ① 「薬師如来縁起」

平等寺において、昭和期に作られた「薬師如来縁起」（平等寺執事記）には、遠く因幡の国より飛来して平等寺因幡堂に安置された薬師如来立像にまつわる説話が綴られている。

それによると、平安期、村上天皇の命で因幡国一宮に赴いた橘行平（実在の人物であり、1005年因幡国司に任ぜられたという、筆者注）が神事を済ませ、京に戻ろうとしたときに病になり、その治癒のために夢に現れた異形の僧の言葉に従って、因幡の国の加留津の海の底から、衆生済度に遥か仏国土から来たと聞いた浮き木を引き上げた。それが薬師如来立像であった。行平はこの薬師如来像を信心し、御堂を建てて安置供養した。まもなく行平は治癒し、京都に戻ったという。

帰京した行平の夢に再び異形の僧が現れた。そして、「我は西の天より来て、東の国の人々を救おうとやってきた。あなたには宿縁があるから、重ねてことを示す」と告げた。そのとき、屋敷の西門に「因習の僧」と名のる来客があり、門を開けてみると、薬師如来像が立っておられたという。それが1003年4月8日の黎明のことである。行平は私邸の屋敷を改造して御堂を作り、「因幡堂」と名づけた。このことは、「山州名蹟志（註④）」などの文書にも残っている因幡堂の由来である。また、行平の孫である光朝禅師が初代住職となったとも伝えられている。その翌年の1004年、橘行平は因幡国国司となった。

その後、皇室の勅願所とされた。また、この「平等寺」という名は高倉天皇から拝命された。当時、因幡堂は、高倉天皇に対する敬意として五条院の御所に遠慮して南

門を閉じていた。そのため、今でも、南門に至る通りは不明門通（あけずどおり）とよばれている。寺には、高倉天皇が寵愛した小督局の琴も平等寺に所蔵されている。このように、因幡堂平等寺の歴史には、皇室とも深い関係を残している。

鎌倉時代には、「一遍上人語録」には一遍上人も一時ここに住まいしたこと、また室町時代、「満濟准后日記」には將軍家も参籠したという記録が残されている。このように、因幡薬師堂、また平等寺という名は、歴史の書物の折々に権威をもった人物とともに登場してきた。

## ② 「町衆の寺」としての歴史

その一方で、町寺としての姿も記録には残されている。時が過ぎ、中世に入ると、因幡堂の境内は町衆に身近な「市のお堂」として、また、芸能興行の場として、人が集まりにぎわいを見せた。勸進猿楽については古く1498年の「実隆公記」にも記されている。前述のように、因幡堂を舞台にした数々の狂言が演じられた。「御湯殿上日記」などの日記類には、因幡堂縁起の説話も登場した。

江戸期には、寄り合いの場として境内に人が集まり、因幡堂芝居として歌舞伎が興行され、見世物小屋が開かれたという。因幡堂縁起は「笑話」にも登場してくる。幕末の新撰組隊士が境内の見世物小屋をおとづれたという逸話も残る。このころの平等寺は、四つの町にかかる広大な境内を有していた。

歴史的事象をおっていくと、因幡堂は何度も焼け、お堂を失っている。1864年の幕末の蛤御門の変での焼失は因幡堂の姿を一変するほどのものだった。中世のころ、近代のころ、そして現在のお堂の姿は異なる。けれども、薬師如来立像は幾度も重なる戦火の時代をくぐりぬけ、町衆に守られ、「お薬師さん」と親しまれてきた。

時を経て昭和の時代、にぎわった縁日など、平等寺近くに住む高齢の人たちには幼い日々の記憶も、戦後、本堂が閉じられ、仏事が絶えたとともに、ごく最近まで遠ざかっていたという。かろうじて、節分の星祭のお寺として、人びとの記憶に細い系譜を残してきた。現住職が寺を継いだ10余年前、寺はそのように閑散として、寺を支えた檀家も去って、にぎやかな様相は過去の夢となっていた。

## 3. 開山1000年法要行事を企画する

開山千年を祝う行事は、寺に関わる人たちの祭ごとである。実行委員会のメンバーとして、檀家から総代4名と、さらに檀家5名が集まった。住職にとって、はじめての寺の盛大な行事であった。1からのスタートだった。すべてが初めての経験であっ

た。住職夫妻の友人である、ほかのお寺の檀家総代が、開山1000年法要・奉納行事についての費用のこと、寄付のこと、檀家の役割、総代の役割、プログラムなど、これまでの経験を提示した。

そのアドバイスによって、2002年梅雨が明けるところには、記念行事について企画され話し合われたことが実施されていった。檀家やゆかりの人たちに寄付をお願いした。その人たちの名前を紅白の幡に書いてお寺を囲む壁に吊り下げた。1枚増えるたびに、その紅白の奉納幡は寺に力強さを増していった。

### ① プログラム

記念行事の5月4日、5日両日共、プログラムは、午前中を法要、午後を奉納行事とした。午後のプログラムには、狂言の舞台ともなった寺に因んで、大蔵流の狂言を決定した。京都に住む茂山一門が5月5日の興行を引き受けてくれていた。因幡堂が舞台となった「鬼瓦」と「因幡堂」などが予定された。室町時代の人びとの様子や、平等寺因幡薬師で笑いあった町衆の声が偲ばれる狂言である。長く大蔵流茂山一門によって演じられ、受け継がれてきた過去と今をつなぐ芸能であった。

4日午後のプログラムには、「今」を意識した。過去からつづく姿ではなく、「今」である。過去に芸能を生み出し芸能を楽しんだように、今の私たちの身近にある芸能を提供したい。そこで選ばれたのが、子どもから高齢者に親しまれている童謡（小学唱歌）と、前年に偶然平等寺を訪れたアメリカのオペラ歌手による「アリア」であった。童謡は、平等寺近くに住む女性のピアノとその音楽友だちによるフルートのデュオで行なうことになった。4日の奉納行事のトリを飾るオペラには、オペラ歌手の希望によって尺八と箏の伴奏を予定した。その前には、地域、友人、偶然などさまざまな縁によって、奉納行事の構成は決まった。

このように奉納行事のメイン・プログラムには、往にし<sup>い</sup>方<sup>ま</sup>の町衆が楽しんだ「市のお堂」を懐かしむ狂言と今の音楽文化が組み入れられ、そして、毎月8日に開かれている境内を囲む「因幡薬師てづくり市」の人たちも、千年祭に向けて準備をはじめた。

### ② 展示・陳列品

開山1000年祭には、寺の重要文化財である本尊薬師如来立像（平安時代、日本三如来）、釈迦如来立像（鎌倉時代、清涼寺様式）、如意輪観音坐像（鎌倉時代）とともに、1998年に改築した客殿に、寺の歴史や過ぎ去った時代の寺の様相を伝える品々―因幡堂縁起写し（江戸時代、種智院本系統）、小督局ゆかりの品である毛髪織込光明真言、

琴、硯箱、また、絹本着色薬師十二神将（室町時代、伝、土佐光茂筆）、呉織・漢織像（室町時代・2体）、銅造十一面観音坐像（室町時代、元北野天満宮所蔵、足利義持寄進と伝えられる）、絹本着色釈迦涅槃図（文化5年、大正9年4月、飯田源次郎氏寄附）、木造大黒天坐像（江戸時代、忿怒形三面六臂）などを展示・陳列することとなった。

作業を介して、住職と実行委員であり檀家である人との対話が続き、ひとつひとつの蔵物などゆかりのある品々が示す謂れや説話が語り合われたという。説明することは住職にとって、寺のもつ固有性や特徴を確認することでもあった。檀家の人たちの多くは、自分たちが属する寺の長い歴史をはじめて耳にした。お寺の歴史を知るとは、檀家というお寺に属する集団の一部としての自分を見つめる機会にもなったという。「誇りですな」と口にした人がいた。

本尊薬師如来立像には、白、黄、紫、赤、緑の紐をつなぎ、訪れた人がその紐の先を手にして、薬師如来と縁をつないでもらうように準備を整えた。本堂の軒先にも、仏教で世界を表わす白、黄、紫、赤、緑の布地を垂れた。

開山1000年を示すチラシにも薬師如来立像を取り込み、さらに釈迦如来立像、如意輪観音坐像や因幡堂縁起絵巻の写真を加え、時空を超えて仏の示現に心ゆだねる「夢想一念」を映し出した。

それらには、開山1000年の記念行事に関わる人たちに、また、集う人たちに、千年の歳月を今に重ねて、新しい記憶として蘇らせる力があつた。檀家の一人は、その歳月に、「人知、人力を超えた不思議さと力を感じた」と、その思いを語った。

### ③ もてなし

当日のもてなしとして、受付、お茶席、和菓子、うどん席の段取りが図られていった。記念行事に集う人びとを歓待するための計画には、住職夫妻や檀家とその家族だけでなく、寺の近隣の人たちも関わっていった。寺の前の食堂や近くに住む人、また平等寺の敷地を借りている弓道場の人たちが協力を申し出てくれた。

そして、1年に満たない期間のうちに、人から人へ、知人から知人へと開山1000年祭の情報が流れ、声がかかけられ、協力する人がさらに人を呼び、力を寄せる人たちの輪が広がっていった。人の力と共に、物品や寄付も集まっていった。人がつながって集ってお寺の行事を支えていく。それは、この寺の持ち味だったかもしれない、と住職も寺の歴史を学んだ檀家も思い始めていた。試行錯誤しながら、一人一人の手と力が添えられていった。

## まとめにかえて 夢想一念

そして、5月4日と5日晴天のもとに、因幡堂平等寺は開山1000年の祭場となった。2日にわたって、延べ450の人たちを迎えた。その日、檀家のひとは、境内を見渡しながらかのような言葉を口にした。

檀家になって数年です。それでも、とくに何かをするでもなく、今から考えたら、お寺のことも余り知らなかったんです。開山千年ということで、お寺の行事を企画することで、いろんなことを知りました。このお寺には歴史があって、本にも出てくるような寺であることも知りました。

行事をするにあたって、住職さんから寺の歴史も聞き、お薬師さんがここに来た<sup>いわ</sup>謂れも聞き、寺の宝物がどんなもんかも初めてわかりました。寺の行事に関わって、いろいろ準備するうちに、檀家として何ができるのかということも考えました。

千年前、薬師如来像が西の因幡より京都の地に飛来したのは、「東の国の人々を救おう」というためであったと伝えられる。それから幾年の間、この寺は、人びとの祈りの場となり、娯楽の場となり、人が集い笑う場としての場面を重ね、そして、「今」という一齣が加えられようとしていた。

千年という歳月が過ぎて、そして時代は大きく変化した。時代によって人の苦しさは異なるであろう。しかし、苦しいときに人知を超えた存在に頼り、守ってもらえると思えたときに得る安心感という意味では、人の心に共通するものがあるように思える。開山1000年記念行事は、歴史を振り返ることによって、そのような人の心を確認する行事ともなった。それは、「お薬師さん」の過去をよみがえらせ、それを今ここに生きる人の心に刻む行事ともなった。1000年祭にむかって、またその日に、「薬師如来縁起」「因幡堂縁起」、そして、この寺に伝えられる「過ぎた日々」が、新しく人の心に刻まれたであろう。

その日も、人びとの無病息災を願う護摩がたかれた。開山1000年祭で、多くの人が、薬師如来に良い縁を結ぶために五色の紐を手にしていった。因幡堂はいまも祈る場であり癒される場であった。五色の紐をしっかり握って、薬師如来立像をじっと見つめ念じる多くの人の姿を目にした。時空を超えて存在する薬師如来に祈り、すがり、そして何かを思い安堵する「今」を生きる人の姿は、伝統を新たに創生する「今」の姿でもあった。

\*本稿執筆にあたり，平等寺御住職御夫妻ならびに関係者から貴重なお話をお伺いしました。心より，深謝いたします。

\*本稿作成に当たり，佛教大学総合研究所の助成に加えて，平成17年度以降，科学研究費（基盤C2，1650035）の一部を用いた。

註ならびに参考文献

- ① 「京都因幡堂平等寺略縁起」（京都因幡堂平等寺執事，発行年不明）
- ② 「日本三如来之随一 薬師如来縁起 京都因幡堂」（解説 山崎泰正，発行年不明）
- ③ 「因幡堂縁起と因幡薬師」『学叢』第五号，中野玄三，京都国立博物館，1983年3月31日，pp.40-84
- ④ 「狂言における因幡堂の位相」，林和利，『名古屋女子大学紀要』第43号（人文・社会編），pp.1-9，1997年林氏は因幡堂の縁起に関する文献として「一遍聖絵」「碧山日録」「擁州府志」「山州名蹟志」などをあげている。「山州名蹟志」については，p.3に引用されている。
- ⑤ 「十三佛さまのお話」，京都十三佛霊場会，pp.7-8，1991年
- ⑥ 「時を超えて語るもの（史料と美術の名宝）」，東京国立博物館・東京大学史料編纂所，平成13年，
- ⑦ 「歴史刻々 命新たに 都の伝統を越えて①」，西田大智，讀賣新聞，2006年1月1日
- ⑧ 「六角堂から六波羅蜜寺へ」『近畿文化』687，田中嗣人，近畿文化会事務局，2007年2月，pp.2-3
- ⑨ 「洛陽三十三所観音巡礼」，平成洛陽三十三所観音霊場会，2005年，p.32
- ⑩ 「歌の中山清閑寺」，藤本弘三郎，1934年，pp.2-5，歌中山清閑寺住職・大釜隆宗（発行）
- ⑪ 「竹内栖鳳と高島屋と因幡薬師」『風俗史学』31号，廣田孝，2005年，pp.22-32
- ⑫ 「橘行平と因幡堂」「在原行平と等善寺」「小督局と清閑寺」『京都発見 二 路地遊行』，梅原猛編，新潮社，1998年，pp.9-26